

本書は芥川賞作家・室井光広(1955～2019)が遺した壮大な未完の実験小説である。私は幸いにも室井氏と知遇を得ることができ、数多くの懇切な手紙を頂いた。室井氏は惜しくも64歳で急逝されたが、入院中も携帯電話(ガラケー)でメールのやり取りを行った。最後に頂いたメールに私が返信した時、室井氏はもうすでに意識はなかった。そして2日後に帰らぬ人になった。このメールのやり取りは室井氏が主宰していた文学雑誌『てんでんこ』に掲載された⁽¹⁾。

室井氏の没後4年目にして、川口好美氏はじめ文学上の友人・弟子たちの尽力により刊行されたのがこの遺著『エセ物語』である。物語は、バルザックの書簡からブルーストが引用した“誤植”入りの「文章」を記したある人物の遺稿ノートを解説するところ(!)から始まる。その人物は「私」の双子の妹と結婚した外国人であるが、この「文章」もベンヤミンから取ったものだという。いきなり最初から「これは何のこっちゃ!？」となってしまうが、読者はこれで音を上げてはならない。物語はこの後、実に750ページも続いていくのである。しかし、これでも当初の構想の5分の3であるという。

ストーリーは有るようで無く、無いかと見えてまた現われ、物語の中には虚実取り混ぜた文献からの博引旁証がなされる。これはいったい小説なのかエッセイなのか。実はその両方なのである。これが『エセ(エッセイ)物語』のゆえんである(室井氏はモンテーニュの『エッセー(随想録)』にならってそう呼んでいる)。上述のバルザックの書簡からして、19～20世紀のフランスの文学者モンテスキューの作品からの「引用」らしい。『法の精神』を書いた哲学者モンテスキューは有名だが、文学者モンテスキューのほうはそもそも実在の人物なのか? しかもこれを書き写した人物は、「引用」の語を「陰陽」と“間違っ”て書いている。そもそも物語それ自体が、とてつもない『エセ(似非)物語』なのである。

ここまで書いた部分でも、まだ本書の最初の3ページほどを説明したに過ぎない。いや、これで説明になっているだろうか。しかし、ここまでのところで気が付く人は気が付くであろう。この物語の背後に、ジョイスやボルヘス、ブルーストやキルケゴールが存在していることを。読者はこの迷宮のような作品の中を手探りで進んで行かなければならない。この手法は、室井氏の芥川賞受賞作の小説「おどるでく」(1994年)でも取られたものでもあった。『エセ物語』は「おどるでく」の続編としても読むことができる。

この実験小説の見取り図は次の通りである。物語は三巻構成になっている(本来は五巻構成の計画で、各章が十干十二支で銘打たれ、全60章で完結する予定であった)。

「第一の巻」は、「室井光広」なる「私」が双子の妹の元夫だったユダヤ系の「重さん」による遺稿ノート(ジュウ)を紐解きながら、自らの記憶を往来する話である。その記憶の「頭陀袋」がいつしか破れて記憶の「ずたずた袋」となり、どこまでが「重さん」でどこまでが「私」なのか、言葉のカオスの中へと読者は誘われていく。

「第二の巻」はエセ物語編纂人の三井幸という女性が「私」

として登場する。彼女はかつて小説家志望の松井光晴(通称マツツイ)と私塾を共同経営し、一時期同棲していたことがあるが、今は鍼灸師の男性と神奈川県某所で暮らしている。松井光晴なる人物は少し発音をずらせば室井光広である。三井幸は東北オクライリ村のマツツイ氏から届いた段ボール箱の中のノート類から、新たな「エセ物語」を紡ぎ始める。

そして「第三の巻」では、やはりエセ物語編纂人の一人である八木タキが「私」として登場する。女性名だが終始「僕」とか「俺」という男性言葉で物語る(「私」で語ることもある)。彼女は大学の獣医学部を卒業して松井ミーハー(光晴)先生の私塾に入門し、O・モロイ(おもしろい!)氏なる諸井治という人物との交流を交えながら、やはり独自の「エセ物語」を語っていく…。

主人公が次々と入れ替わって自らの物語を語っていく書き方は、キルケゴールの『人生行路の諸段階』を連想させる。しかもこの物語の中にさらに小さな謎めいた物語(『エセ物語』の場合は和歌もどきの一覧表や歌舞伎めいたものまである)も含まれているところまでよく似ている。そして、これら三巻全体は決して話はバラバラになってはいない。「第一の巻」で登場した重さんの遺稿らしき『東亜共通常用語三〇〇〇語』が度々引用され、東亜(日本、中国、韓国)の3言語の統一した話し言葉の創成が目指されているようなのだ。

作者・室井光広の言語に対する愛好は相当なもので、東アジアの言語だけでなく様々な欧米語がこの物語の中で日本語と交差しあう。しかも、日本語の中で室井氏が軸足を置くのは、自らの出身である福島の会津方言である(登場する重要な地名の多くが東北地方のもの、ただし架空の地名であるが)。室井氏はヨーロッパの東北弁たるデンマーク語や、またデンマーク文学に親近感を抱いており、『キルケゴールとアンデルセン』(講談社、2000年)という大部の評論をも書いている。

本書を通読して思うのは、文学というものがいかに無償の営みであるかということだ。『エセ物語』は東日本大震災を跨いで書き続けられた。室井氏は震災以降、商業誌からきっぱりと袂を分かち、自ら「単独者の組合」たる「てんでんこ」なるグループを作り、そこを舞台に創作活動を行った。そして、壮大な実験小説である『エセ物語』もまた、クラウドファンディングによる心ある多くの人たちの支援があって、作者没後4年目にして刊行に至ったものなのである。

[註]

(1)「ゲンデルセン通信スムーレ篇」(室井光広・金子昭)、『てんでんこ』(室井光広追悼号)、2020年、2～62頁。

